

企業

菜の花でつながる縁

大崎市

千田 信良 有限会社千田清掃

取材日 2013.07.17

有限会社千田清掃代表取締役。「時代をリードする創造的企業として社会に貢献しつつ会社の繁栄と社員の幸せを実現する。」を経営理念として掲げ、他にも宮城県環境教育リーダーやおおさきバイオエネルギー協議会の理事兼事務局長を務めるなど、環境や地域貢献をライフワークとし活動している。

3月11日 14時46分

宮城県大崎市内の病院の、2階の病室にいる時に地震が来た。多忙な業務で体調を崩し、数日前より入院していたのだ。「また地震か」と思っていたら、徐々に揺れが激しくなった。点滴を受けていたので、外れないように押さえ、ベッドにしがみついた。ところが、揺れはとても大きく、6人部屋のベッドやテレビ台同士が激しくぶつかり合った。経験した事のない揺れは非常に長く続き、いつ終わるのだろうかという恐怖を覚えた。

すぐに停電したが、病院には非常用電源（発電機）が完備されている。しかし、日頃から動かしていないためか、よく止まった。燃料も十分にはないようで、発電機屋さんと病院のスタッフが燃料調達のため必死に連絡を取っている。私はただ事ではないと感じて、すぐに携帯電話のワンセグをつけた。

津波の映像を目の当たりにし、言葉を失った。過去の災害の話は聞かされていたけれど、まさか自分が生きている時代にこうした悲劇が起きるのかと目を疑った。宮城県女川町や石巻市、塩竈市にいる親戚の安否が気になって仕方がなかった。携帯電話のワンセグから得た情報を看護師や病院スタッフの皆さんに伝えた。

大崎市の緊急災害給油基地に

約2週間の入院と言われていたが、翌日、退院を申し出て許可をもらった。現場の先頭に立って指揮しなければならなかったからだ。2007年の新潟県中越沖地震でバキュームカーを派遣したボランティアの経験があったので、すぐに大崎市の災害対策本部へ向かい、自分達の業界がどう対応をするか情報を共有した。

停電になった時、すぐにBDF（Bio Diesel Fuel：バイオディーゼル燃料）が役に立つと感じた。電気工事経験のある社員が、所有しているディーゼル発電機から事務所の電源を確保した。また、震災の起こる5日前にBDFを精製する新プラント



が完成したばかりで被害が最小限だった。そこで、想定される燃料需要に備えて、ディーゼル発電機でBDFを製造した。さらに弊社は特殊なB5という、軽油と5%のBDFを混合した燃料を扱っているため、原料となる軽油が地下タンクに10kl備蓄してあった。多くのガソリンスタンドがポンプを手押ししていた時に、ディーゼル発電機からポンプを回す電源を確保する事もできた。その旨をすぐに市長に申し出ると、大崎市の緊急災害給油基地・燃料保管基地として位置づけられた。発電機を持つ病院や浄水場、下水処理場などへ優先的に燃料を提供し、公用車等緊急車両、沿岸部の同業者にも給油活動を行なった。また、沿岸部では地元処理業者が被災したため、各地で避難所に設置された仮設トイレが使用できなくなる事態が発生した。そこでBDFを給油した自社のバキュームカー2台を被災地各地に運行させ、山形県の各市町村の処理場へ搬送した。震災から2週間ほどが経過し、全国各地からバキュームカー60台などの支援車両が応援に来た。弊社の車両をBDFで走らせながら、宮城県塩竈市、多賀城市、石巻市、気仙沼市の同業者に燃料を配達したり、沿岸部の同業者が取りに来たり、うまく中継基地になる事ができたと感じる。BDF、B5、新プラントの施設があったからこそさまざまな連携につながり、沿岸部をバックアップできた。

原料や燃料が集中するコンビナートが沿岸部に多

く立地しているの、リスクを分散する意図で、内陸部にもコンビナートがあってもよいのではないかと感じた。

震災から5日目に女川町へ

震災から5日目、親戚の救助のために宮城県女川町へ行った。ほとんど情報がなかったので、現地へ行ってみるしかないと思った。自衛隊出身の社員を連れて、まだ雪が降ることもあったので防寒対策を万全にし、車にBDFを積んで準備したが、途中から歩く覚悟をしていた。石巻が近づくにつれて悲惨な光景が現れた。私は戦争を経験していないが、焼け野原のように見るも無残な景色が広がっていた。何も残っていないが、そこら中に確かに生活していた跡がたくさん残っていた。親戚は大丈夫だろうかと不安がよぎった。

女川町立病院までは車で直接行く事ができた。自衛隊が道路を復旧したのかと思ったが、驚くべき事に地元の方々が自衛隊の応援が来るように道路の瓦礫を撤去したそう。病院では誰がどこの避難所にいるかを書いた貼紙があった。必死で親戚の名前を探し、女川町立体育館にいる事が分かった。避難所となった体育館はおそらく広いのだろうが、1人1畳もないほど狭い範囲に大人が何人も身体を寄せ合って暖を取っていた。体育館に親戚がいる事は分かったが、その混乱の中で探すのも大変だった。ようやく70歳を過ぎた叔父と叔母を見つけ出し、いとも運よく助かった事が分かった。消防団であるいとこの話を聞くと、高台になっている女川町立病院に逃げ込んだが、1階まで津波が来たそう。水がどんどん上がってきたと言う。女川には何度も足を運び、親戚を通じて物資支援をした。避難所には水や毛布はあったが、多くの人が着の身着のまま避難しているので、歯ブラシのような細やかな物資が大変喜ばれた。今回は自衛隊の動きが早かったのではないかと感じる。初めて女川に行った時にはすでに自衛隊が来ていた。ヘリコプターから救援物資をグラウンドに降ろす作業を目の当たりにして、「日本は捨てたもんじゃない、生かされた自分は頑張らねば」と思った。

田舎と都市の違い

大崎市は10日ほど停電したが、都市ガスはずっと止まらなかった。また、田舎なので親戚に農家がいるし、年配女性の方々の保存の知恵を持ち寄って、1週間は食料に困る事はなかった。そうした面ではコンビニエンスストアに都市型難民が殺到した仙台市内よりも強かったと思う。あの頃はどの地域でもガソリンが無かったが、う



撮影：2011.3.23 宮城県大崎市 全国各地から応援に来た支援車両

ちはBDF用のディーゼル車と燃料があったので、鳴子温泉にも行く事ができた。また、親戚に頼んで山形県に食料を調達しに行ってもらって社員に分配し、ビニールハウスで炊き出しを行なった。

菜の花でつながる縁

2011年5月14日、復興支援イベント「菜の花フェスティバルinおおさき」を鳴子温泉郷・川渡で開催した。震災後、鳴子温泉地域にはピーク時で約1,000人以上の沿岸部の方々が2次避難をされており、その方々と大崎市全体を励ましたいと思ったからだ。

亡き父が旧志津川町の警察署長を務めており、初めて志津川を訪れた時に「昔、津波があったんだよ」と聞かされた。小さいながらも「こんな大きな堤防は見た事がないな」と、津波の事を意識した。また、実姉（杜けあきさん）が宝塚に入った時に志津川の皆さんがパレードをして地元をあげて応援してくれた。そうした経験から「何か恩返しをしたい」という想いが募り、自分が志津川のためにできる事は何なのだろうと考えた。

外の菜の花畑で少しでも楽しんでもらおうと思った。姉とも相談し、いろいろな人に声をかけて、素晴らしいイベントができあがったと思う。ゲストには姉の杜けあき、さとう宗幸さんを迎え、自衛隊音楽隊による演奏や熱気球に乗って空からの菜の花畑鑑賞会や菜の花料理の試食、地元の企業やボランティアによる炊き出しなどが行なわれた。当日は避難者や地元住民などあわせて約1,500人が来場した。最後に来場者の方から「本当にありがとう」と言われたのが一番印象に残っている。菜の花を通じて被災者の皆さんの心に絆が生まれたのではないかと感じる。毎年続けようと、今年も開催した。

また、大崎市や東北大学と連携して、菜の花を通

じた循環型社会を目指す「菜の花プロジェクト」に参加し、津波で塩害の被害を受けた農地や、放射線で耕作できなくなってしまった農地の再生プロジェクトを行なっている。役割分担を行ない、弊社は刈り取り作業、種選別や搾油作業が担当だ。種にセシウムは移行しないそうで、絞った油は安全なので、これから福島県の農地をどう再生させるかが課題となる中でBDFが有効ではないかと考えている。

BDFの原料となる菜の花でさまざまなつながりができ、いろいろな方々とご縁があった。菜の花プロジェクトに出会っていなければ「菜の花フェスティバルinおおさき」「菜の花プロジェクト」にもつながらなかった。BDF事業を展開していて本当によかったと感じている。

BDFの普及における課題

BDFの普及がなかなか進まなかったのは、粗悪なBDFが多かったからだと思う。弊社では分析室があり、品質にこだわったBDFを製造している。これまで高品質のBDFを作るにはどうすれば良いのが課題だったが、それはクリアした。次はどうコストダウンするかが課題だ。品質マニュアルをきちんと確立して、コストダウンを考えていきたい。

また、まだまだBDFの認知度が低いことも課題だ。そのため、県より宮城県環境教育リーダーの委嘱を受け、依頼があれば積極的に小学校をはじめとする教育現場へ環境出前講座に行っている。また、高校生のインターンシップや地域の団体の視察の受け入れを積極的に行なっている。2012年9月にも韓国の大学生30名が来てくれ、弊社のプラントなどの施設見学が行なわれた。「地球環境に国境はない」と話をさせていただき、心の通った良い視察研修になったのではないと思う。

こうした努力の甲斐あってか、廃食用油の回収量はどんどん増えており、BDFは大手ゼネコンの災害廃棄物処理施設の建設重機や発電機、破碎機の燃料としても使用されている。まだまだ始まったばかりではあるが、CSRやISOの観点から「うちの営業車やトラックに使いたい」と問い合わせも来ている。

大震災を振り返って

震災を機に再生可能エネルギーに対する社会の認識は大いに変わった。自分も変わるきっかけになった。2013年3月、「おおさき未来エネルギー株式会社」が誕生した。太陽光やバイオマスなどの自然エネルギーを利用した発電・発熱業務およ

び電力・熱・燃料の販売を目的とした会社だ。大崎市の再生可能エネルギーの勉強会をきっかけにプロジェクトチームが発足して、市内の企業の代表取締役が集まって発起人となり、会社設立に至った。エネルギーの地産地消に取り組もうとしている。現在、メガソーラーの建設に向けて準備中だ。将来的には地域の皆さんに出資していただき、市民ファンドを作りたい。その配当を地域の地場産品や鳴子温泉宿泊券にする事で、地域の絆を深めるきっかけを提供し、地域に貢献する事を最大の目的に考えている。

また、いかにリーダーを発掘して育てていくかが非常に重要だと感じた。成功の反対は失敗ではなく、何もしない事だ。リーダーは聞き上手になり、いかに多様な意見をまとめ、つなげるかが鍵になると思う。家族は家族でお父さんが守らなければならないし、会社は会社で社長が先頭に立って、社員を守らなければならない。どこかの誰かがしてくれるわけではないのだから、皆で協力していくべきだ。若い人には故郷を思っ働く場所を作ってあげたいと思う。「世のため、人のため、地球のため」にコミュニティ、人のつながりやご縁をもっと意識して、ライフワーク、ビジネスにつなげ、この地域を引っ張っていきたい。



撮影：2011.5.14 宮城県大崎市 菜の花フェスティバルinおおさき